Architect at Home

小林 武
CASA-K

1984年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

庭側からの外観。左手奥のヴォールト屋根部分が娘さんの部屋だったところ。今は小林さんの仕事場になっている

小林武さんの自邸「CASA-K」は、もうほんの目と鼻の先にあるはずなのに、私はなかなかそこに辿り着けず、同じところを何度もグルグル歩き回っていました。私の記憶ではこのあたりにはケヤキの大木に囲まれた農家や畑地が残っていて、武蔵野の面影が色濃く漂っていましたが、その大きな農家の敷地が細分化され、住宅が所狭しと建ち並ぶ風景に様変わりしていたのです。地図も持たず、うろ憶えの住所と20数年前の記憶だけで辿り着けると思っていたのが迂闊でした。自力で探し当てるのを諦め、小林さんに電話して自分の居場所を伝えると「すぐ近所だから、見えるところまで迎えに出るよ」という、昔と変わらぬ快活で歯切れの良い声が返ってきました。

居間の日だまりに座り込んでするお喋りはまた格別。昔から、小林さんとの話題は、圧倒的に「建築」より「映画」でした

この住宅が完成した1984年の冬、お披露目的なパーティがあり、身近な友人たちと賑やかに押しかけたことがありました。開口一番、小林さんが「この家はともかく寒いので、床暖房を入れていないときはソファの上にあぐらをかいて床面から足を浮かすんだ。なにしろ、床面から10cmぐらいまでは水を張った池のように冷たくなるんだから…」と言ったことなど、今でもはっきり憶えています。そんな話がきっかけになって、内外コンクリート打放しの建物の、極寒と炎暑の厳しさが、どれほど想像を絶するものかということを、とうとうと語って聞かせてくれました。設計者自らが語る建物の実情と、生活者としての体験談なのですから、話はいちいち具体的で、独立したての私には大いに勉強になりました。建築家という人種は、自身の設計した建物がいかに素晴らしいか、その美点、見どころ、設計の手腕など、つまり「手柄」について語るのはまことに言葉巧み、かつ饒舌ですが、設計の思惑が外れたところ、予想外の失敗、設計上の大きな反省点などがあったにしても、そこから目をそらし、他人には多くを語りたがらないものです。ところが、小林さんは、こういう点がまことに潔く、ありのままを語るのです。そしてそうした言葉の端々に、いかにも小林さんらしい、ユーモアと皮肉と自嘲が入り交じった警句めいた言葉が隠されているので、うっかり聞き流すわけにはいきません。先日訪ねたときも「建築家の言葉を鵜呑みにしちゃいけないって、クライアントによく言うんだよ」などと、サラリと言ってのけるなど、小林節は相変わらず健在でした。

いきなり小林武さんの人となりの紹介になってしまいましたが、ここで、肝心の建物「CASA-K」について紹介しておかなくてはなりません。

「CASA-K」は、ヴォールト屋根を載せた2棟の建物をL型に配置した住宅です。棟のひとつには居間・食堂・台所などのパブリックな部分が入り、もうひとつの棟は主寝室と子供室とアトリエなどにあてられています。ふたつの棟は構造的にも視覚的にも切り離されていて、この間隙がエントランス部分になっています。

先ほど書いたとおり、仕上げは内外とも打放しコンクリートで、計画当初はヴォールト屋根の上に断熱層を兼ねた土を入れ雑草を生やすつもりでいたそうですが、ペンペン草の生えた屋根は「ゾッとしない」という奥さんの反対意見があったとかで、そのままになっています。

じつを言うと、久しぶりに「CASA-K」を訪ねる私には確かめてみたいことがありました。いや、「確かめる」というより、五感で「感じ取りたい」と思っていたと言ったほうが良いかも知れません。

上――奥さんからの「体育館のような大きい部屋を」という要望に「心理的には応えた」と小林さんの言う広々とした居間。ささやき声も聞こえる音響効果（？）を備えているという（ところで「それ、いいことなの？」小林さん）
下――玄関脇の大木はソロの樹（カバノキ科の高木で別名アカシデ）。20数年経つというのに、打放しコンクリートは驚くほど綺麗。樹木の多い恵まれた環境のせいでしょうか

20年ほど前、この住宅を二度目に訪れたとき「うーん、この建築はどこかで見たことがあるぞ！」と思いましたが、そのときはどうしても思い出すことができず、あとになって、それがル・コルビュジエの「ジャウル邸」だったことに思い当たりました。規模こそ違いますが、2棟で構成されていること、その2棟に90度方向の違うヴォールト屋根が架けられているこ

上――家具が数点増えただけで、完成したころとほとんど印象の変わらない室内。住み手の意志がよほど強くないと、こうはいかないんですよねえ
下――玄関ホールの壁に埋め込まれたアラビア文字のタイル。訪れた人に、ここに住んでいる人間が「砂漠好き」、「アラブ文化好き」であることを、さりげなく教えています。なかなか「憎い」方法です

と、L型の配置、玄関扉の変則的なヒンジの位置、一升枡を取り付けたようなガーゴイル（雨水の落とし口）の形など…。当初の計画通り土を載せたヴォールト屋根が雑草に覆われていたら、その印象はいっそう「ジャウル邸」に近づいていたに違いありません。

誤解を避けるために、ここで付け加えておきますが、歴史的な名作に対してこうしたかたちで敬意を表するやり方を私は好ましく思います。それを「引用」と呼んで、建築手法のひとつとしてあっさり位置づけてしまう考え方には賛成しかねますが、もちろん、小林さんにはただの建築手法という意識はないはずで、むしろ、ル・コルビュジエへの「オマージュ」、あるいは建築の形をした「ラヴ・レター」と呼んだほうがピッタリするような気がします。それに、似ているのは見かけだけのことで、肝心のプランはまったく小林さんのオリジナルです。

ところで、今度の「CASA-K」訪問で私が確かめたかったことはふたつあります。

ひとつは、ほかでもないル・コルビュジエの建築を見学する際に、私がいつも強く感じる独特の「匂い」、あるいは「気配」のようなものが、「CASA-K」からも感じられるだろうか？ということ。もうひとつは、『アラビアのロレンス』に憧れ、砂漠に憧れたあげく、10年あまり勤めた吉村順三事務所を退所した後、夫婦そろってドバイに移住した小林さんが帰国後に建てたこの住宅から、イスラム的な、あるいはアラブ的な建築の影響が感じられるだろうか？ということです。

この20年間に、私はかなりの数のル・コルビュジエ作品を見学し、その建築空間に身を置いてきました。一方でイスラム圏、アラブ圏へも繰り返し旅してきましたから、そうした経験と照らし合わせて、あらためて「CASA-K」を見てみたいと考えていたのです。

結論から言えば、私の予想に反して、「CASA-K」からは、ル・コルビュジエの匂いもアラビックな雰囲気も思ったほど強く感じられませんでした。打放しの壁とヴォールト天井、全面タイルの床、その上に敷かれたペルシャ絨毯、ル・コルビュジエのデザインしたテーブル、室内を眺めまわせば、道具立ては見事に揃っているのに、そこから醸し出される雰囲気は、むしろ日本的と呼んでもよいものでした。大きな開口部からゆるやかに庭に繋がっていき、今度は庭から室内に流れ込んでくる流動的な空間、その大きな開口を可能にする戸袋と、戸袋の中にお行儀良くおさまるガラス戸、網戸、障子など建具のデザイン。床に座り込んで差し込んでくる冬の穏やかな陽射しを浴びて小林さんとお喋りしながら、私は民家の座敷や縁側にいるような錯覚にとらわれていました。

「寝室の方もどうぞ…」。誘われるままに、私は客船のキャビンを思わせるコンパクトサイズの寝室棟の中を歩き回りました。そして、今度は軽井沢の「吉村山荘」を思い出していました。この「CASA-K」は、吉村順三流の凝ったディテールを受け継いだ設計ではなく、できればディテールのないアッケラカンとした建築にしたかった、という話は小林さんから以前にも聞いていましたが、そのように設計された空間から、吉村建築特有の匂いが漂ってくるのはなぜでしょう？それが、ほどよいスケール感からくるものか、梯子段などの形やディテールから連想されるものか、あるいはその双方があいまってのものなのか、結局、私には分かりませんでしたが、そう強く感じたことは確かです。師匠の影響は、好むと好まざるとにかかわらず、拭いがたいものなのかも知れません。

「この住宅で小林さんの一番のお気に入りはどこですか？」という私の質問に小林さんは間髪を入れず「場所！」と応えました。「場所」とは、ソロの木々をはじめ様々な樹木の林立する「CASA-K」の敷地のことです。小林さんはこの場所で生まれ、ここで育ち、ここに自邸を建て、ここで長年暮らしてきました。そしてここで一人娘を育て、そのお嬢さんをここから嫁がせ、今は奥様の久美子さんと二人で暮らしています。その小林さん夫妻を、子供の頃に登ったソロの木々が大きく包み込んで見守っているのです。

「庭先にね、二畳半ぐらいの小屋を建てて、そこに引っ越すのが夢なんだ。カミさんと娘たちに建物を明け渡してさ…」。

この話を聞きながら、私は南仏にある、ル・コルビュジエが晩年を過ごした小屋のたたずまいをぼんやりと思い浮かべていました。✱

なかむら・よしふみ――建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972～74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976～80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』（新潮社　2000）、『意中の建築 上・下』（新潮社　2005）などの著作がある。